

ヤンデレ的思考傾向と 大学生活の充実の関連

Relationship between yandere thinking tendency and University Life Satisfaction

檜山 凜 江草 遼平 赤木 茅

Rin Hiyama, Ryohei Egusa, Kaya Akagi

千葉商科大学

Chiba University of Commerce

Abstract: "Yandere" is an archetype among Japanese young adults that expresses characteristics such as an intense fear of being abandoned by one's partner and a tendency to constrain one's partner.

This paper clarifies the components of this yandere tendency and the influence of the "Satisfaction of University Life" Scale on the yandere tendency.

We administered questionnaires on the "Satisfaction of University Life" Scale and the "Yandere Tendency Scale" to about 60 university students and conducted a residue analysis and a Structural Equation Modeling. Residual analysis revealed nine associations between the scales, including "high anxiety about college life and frequency of alert behavior toward one's partner" and "high academic satisfaction and degree of service to one's partner." Structural Equation Modeling revealed that four factors, "emotional support," "desire to possess," "fear of abandonment," and "tendency toward self-sacrifice," explained the Yandere tendency scale. Furthermore, this analysis revealed a causal relationship between "commitment to university activities," a subscale of the college life fulfillment scale, and yandere tendency.

1 はじめに

近年大学生等の若年層における依存的な恋愛傾向は、「ヤンデレ」と表現され、一種のキャラクターとして認知されている。ヤンデレは「病んでいる」と「デレデレする」を併せた造語であり、恋人に対して病的・攻撃的な態度を表す属性である[1]。また、特定のキャラクターやアイドルなどを熱心に応援することをアイデンティティとし、金銭・行動において自己犠牲的なまでの支援をする「推し」文化など、特定の対象に対する依存的な関係性が若年層を中心として一種のトレンドとなっている[2]。本稿ではこのような、一種のトレンドとしての依存性の中でも、若者の恋愛傾向に着目する。

ヤンデレを特徴づける要素の1つとして恋人または恋愛対象者への依存傾向がある。大学生は恋人への依存が強いといわれており、依存によるDV被害や、精神的な病理への関連が示されている[3]。それらの問題の解決手法としても青年期に適応的な依存関係を構築することが必要とされており、そのためには大学生が依存的な恋愛関係に陥りやすい要因を分析する必要がある。

大学生を含めた青年期に依存関係が生じやすい要

因は様々な分析が行われている。岡部らは大学生の恋愛依存に関して親子関係が依存的であれば、恋人との関係も依存的になると分析している[4]。田沢らは、失恋への対処傾向に注目し、恋愛依存傾向が高いほど、失恋時に強いショックを受けることが分かり、未練が残ったり、相手を恨んだりといった傾向もあると分析している[5]。

これらの先行研究は若者の恋人に対する依存傾向のみを対象としたものであるが、ヤンデレに代表される恋愛傾向はより広い概念である。恋愛依存傾向としては、「警戒行動」、「独占欲求」など、恋愛対象を自分のものとし、他者をコントロールする傾向が上げられている[6][7]。一方で、本稿では「ヤンデレ」や「推し」に代表される現代の若者の依存傾向をそれらの「恋愛対象への行動規範欲求」に関するものに加えて、自分自身の「奉仕犠牲」的な行動とそれをアイデンティティとする「自己の行動規範」に関するものとして捉える。すなわち、本研究では恋愛を対象として、現代の若年層に見られる、特定の対象に対する依存的な傾向とその要因を明らかにすることを目指す。

先行研究は青年期という属性を対象にしており、大学生という集団の尤も顕著な特徴である、大学生活に関する分析を扱っているものではない。

そこで、本研究では現代の大学生の恋愛依存傾向をヤンデレ傾向として独自に定義し、大学生生活充実度との関係性を明らかにすることを試みる。大学生生活充実度とは、大学生生活充実度尺度(SoULS 12)[8]において「大学生が大学で大学生としての生活を送る中で今感じる大学生活に対する肯定的な感情」と定義される指標である。

検証手法として、学生を対象としたアンケート調査を実施し、統計的にヤンデレ傾向と生活充実度の関連を明らかにした。

2 方法

ヤンデレ傾向に関連した 27 問の質問と大学生生活充実度尺度(SoULS 12)の開発[8]による大学生生活充実度に関する 12 問の質問をアンケートとして実施する。それらの結果から順位相関係数を求め、独立性の検定、残渣分析を行う。

2-1 データの説明

2-1-1 質問項目

ヤンデレ度に関する質問項目は、恋愛依存に関する尺度 [6]、恋愛関係嫉妬尺度[7]を参考に項目を整理し、独自の項目を含めて全 21 項目で作成した独自の項目は自己の行動規範に関わる「一途精神」「奉仕・犠牲精神」およびその背景としての「見捨てられ不安」である。質問項目は以下のとおりであり、これらの質問を「よくある」「たまにある」「どちらでもない」「たまにある」「全くない」の 5 段階評価で回答を取得した。

表 1：ヤンデレ度に関する質問項目

警戒行動	Q1	恋人に誰とどこで何をするのかを聞くことがある
	Q2	恋人に仲が良い人たちのことについて詳しく聞くことがある
	Q3	恋人に過去の恋人関係について聞くことがある
精神的 支え	Q4	恋人がいることで容姿について自分磨き（筋トレ、ダイエット、美容、ファッションを調べるなど）をすることがある
	Q5	恋人がいることで能力について自分磨き（学業、アルバイトや仕事に役立つスキルの獲得など）をすることがある
	Q6	落ち込んだり嫌なことがあったときは恋人のことを思い浮かべ元気を出すことがある

恋人優先	Q7	自分の時間を優先し、恋人との時間がなくなることもある(逆転項目)
	Q8	恋人の言うことでも、自分が嫌なことなら従わない(逆転項目)
	Q9	恋人の予定を把握し、会える可能性があれば、自分の予定を入れないようにしておくことがある
独占欲 求	Q10	恋人に自分との予定以外の予定があると気分が下がることもある
	Q11	恋人に短時間の暇があるときは、自分が暇つぶしになってあげようとテキストや電話でやり取りをすることがある。
	Q12	恋人がいつ、どこで誰と何をするか、細かく尋ねることがある
一途精神	Q13	恋人に、愛情表現をすることがある
	Q14	恋人がいても、他の人を恋愛対象として意識することがある(逆転項目)
	Q15	交際しても短期間（3 か月）で分かれてしまうことがある(逆転項目)
見捨てられ不安	Q16	恋人に嫌われたくないので、デート代を出したりプレゼントを贈ることがある
	Q17	恋人に嫌われたくないので、会いたいと言われれば時間がなくてもなんとか時間を作ることがある
	Q18	恋人に嫌われたくないので、会いたいと言われればどんなに疲れていても会いに行くことがある
奉仕・犠牲精神	Q19	恋人のために料理や洗濯、掃除などの家事を率先して行うことがある
	Q20	恋人のために送り迎えをすることがある
	Q21	恋人のために仕事や課題の手伝いをすることがある

大学充実度に関する質問項目は、佐久田らによって作成された大学生生活充実尺度（SoULS12）を引用した[8]。これは、「交友満足」、「学業満足」、「不安のなさ」、「大学へのコミットメント」の 4 つの下位尺度を持つ全 12 項目の尺度である。各項目は以下の通りである。回答は、「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「どちらでもない」、「少し当てはまる」、「当てはまる」の 5 段階評価で取得された。

表 2：大学充実度に関する質問項目

下位 尺度	項目
Q22	学内の友人関係に満足している

交友満足	Q23	大学では周りの人と楽しい時間を共有している
	Q24	大学で良い友人に出会えた
学業満足	Q25	学びたいことが大学で学べている
	Q26	興味のあることが大学で学べている
	Q27	この学科で学ぶ学問は自分に合っていないような気がする(逆転項目)
不安のなさ	Q28	これからの大学生活の先が見えず不安である(逆転項目)
	Q29	卒業までの大学生活で何をしたら良いのかわからない(逆転項目)
	Q30	この先の大学生活に不安がない
大学へのコミットメント	Q31	大学では積極的に取り組めるものがある
	Q32	大学で熱中できるものがある
	Q33	大学ではいろいろなことができそうだ

これらの質問を「当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の5段階評価で回答を取得している。

本調査は、千葉商科大学の学生を対象として2023/12/18-2023/12/21に実施した。千葉商科大学は、千葉県市川市に所在する、私立文系大学である。回答数は66人であり、その中でも参加に同意し、質問に回答した人数は64人であった。さらに、恋人が過去にいたことがある、いると回答した人数が60人であった。

また、逆転項目はQ7, Q8, Q20, Q21, Q27, Q28, Q29,であり、それらは正順に処理している。

2-3 手法

各変数の関係を分析するため各変数の組み合わせに関して相関分析、 χ 二乗検定及び残渣分析を実施した。また、それらの結果から、モデルを構築し、共分散構造分析を実施した。

3 分析

3-1 相関分析

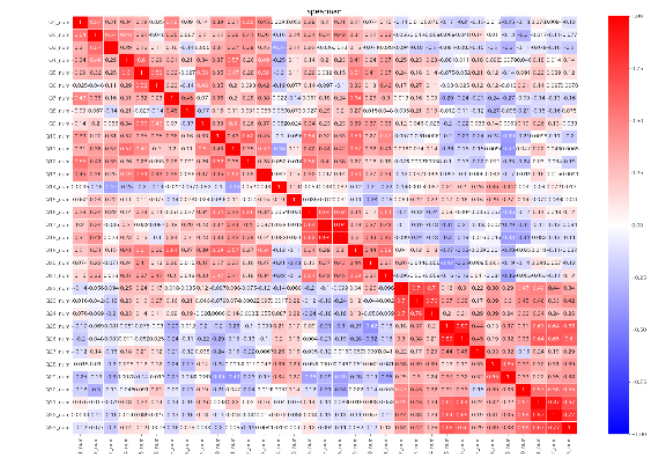


図1：順位相関のクロスプロット

図1は質問項目間の順位相関係数を求めてクロスプロットにしたものである。Q1～Q21までがヤンデレ度、Q22～Q33が大学充実度である。

ヤンデレ度同士、大学充実度同士では、正の相関になっていることから、それぞれが同様の解答傾向を持っていること、また逆質問が機能していることが分かる。反対にヤンデレ度、大学充実度の組み合わせでは弱い負の相関が見られ、それぞれが逆の回答傾向を示している。

3-2 χ 二乗検定

表3は χ 二乗検定を行った結果である。なお、質問項目の組み合わせのうち、有意差の見られたもののみを掲載している。

表3： χ 二乗検定の結果

	項目	p
Q3 ×	恋人に過去の恋人関係について聞くことがある(警戒行動)	0.010
Q29	卒業までの大学生活で何をしたら良いのかわからない(不安のなさ)	
Q5 ×	恋人がいることで能力について自分磨き(学業、アルバイトや	0.000
Q25	仕事に役立つスキルの獲得など)をすることがある(精神的支え)	
	学びたいことが大学で学べている(学業満足)	
Q5 ×	恋人がいることで能力について自分磨き(学業、アルバイトや	0.000
Q26	仕事に役立つスキルの獲得など)をすることがある(精神的支え)	
	興味のあることが大学で学べている(学業満足)	
Q14 ×	恋人がいても、他の人を恋愛対象として意識することがある	0.004
Q26	(奉仕・犠牲精神)	
	興味のあることが大学で学べている(学業満足)	
Q14 ×	恋人がいても、他の人を恋愛対象として意識することがある	0.022
Q28	(奉仕・犠牲精神)	

これからの大学生活の先が見えず不安である(不安のなさ)				
Q14 ×	恋人がいても、他の人を恋愛対象として意識することがある	0.0048		
Q29	(奉仕・犠牲精神)			
	卒業までの大学生活で何をしたら良いかわからない(不安のなさ)			
Q17 ×	恋人に嫌われたくないので、会いたいと言われればどんなに	0.009		
Q28	疲れていても会いに行くことがある(一途精神)			
	これからの大学生活の先が見えず不安である(不安のなさ)			
Q19 ×	恋人のために送り迎えをすることがある(見捨てられ不安)	0.010		
Q25	学びたいことが大学で学べている(学業満足)			
Q19 ×	恋人のために送り迎えをすることがある(見捨てられ不安)	0.021		
Q26	興味のあることが大学で学べている(学業満足)			

上記の 9 組が有意となった。χ² 乗検定の結果では、大学生活充実度尺度における「学業満足」と「不安のなさ」と、ヤンデレ尺度のとの関連性が示唆されている。χ² 乗検定の結果では、それぞれがどのように関連しているのかは不明であるため、以下それぞれの関係性に関する残渣分析を行う。

図 2, 3 は表 3 に掲載されている質問項目の組み合わせにおける標準化残渣の中で顕著なものを抜粋して掲載している。各セル内の数値が標準化残渣を表しており、数値が 1.96 以上の交点(濃い赤)は期待値に対して有意に回答数が多く、-1.96 以下の交点(濃い青)は有意に回答数が少ないことを表している。

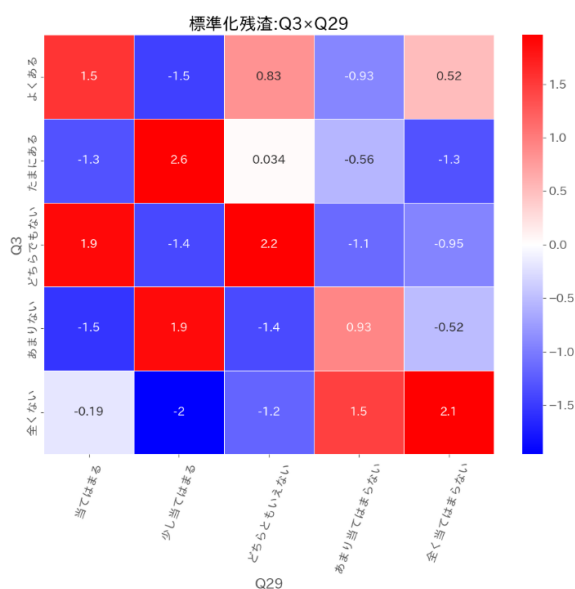


図 2 : Q3 と Q29 の標準化残渣

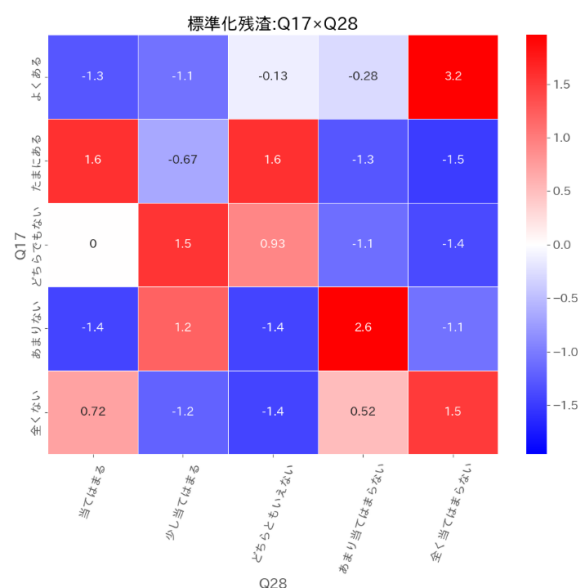


図 3 : Q17 と Q28 の標準化残渣

図 2 の Q3 と Q29 の間で対角成分の標準化残渣が +1.96 以上となっており、恋人に過去の恋人について聞くなどの警戒行動を取る傾向が強いほど卒業まで何をしたら良いかわからないとった不安の強さが高くなるという関連性が見られた。

また、図 3 の Q17 と Q28 の間でも右肩下がりの交点において標準化残渣が 1.96 以上となっており、大学生活の先が見えず不安を感じる傾向と、送り迎えなどの恋愛対象者へ向けた一途な行動傾向との間に連動した関連があることが分かる。

3-3 共分散構造分析

次に作成された因子と質問項目の関連及び、ヤンデレ因子と、大学生活充実度の間の因果関係进行分析するために共分散構造分析を行う。大学生活充実度の因子は SoULS12[8]の下位尺度を使用する。ヤンデレ度に関する因子は、論文[6]から「精神的支え」「独占欲求」、論文[7]から「警戒行動」という因子を使っている。その 3 つの因子にオリジナルの因子「恋人優先」「一途精神」「見捨てられ不安」「奉仕・犠牲精神」を加えている。ただし、因子として精度が低かった「警戒行動」「恋人優先」「一途精神」は除いている。図 4 は、共分散構造分析の結果を表している。各因子は、角取りの四角形で表されており、因子から質問項目 Q1~Q33 への矢印上には因子分析における寄与率と、無相関検定の p 値が記載されている。因子間の矢印には、回帰分析のパス係数(非標準化解)及び、各パス係数の p 値が記載されている。

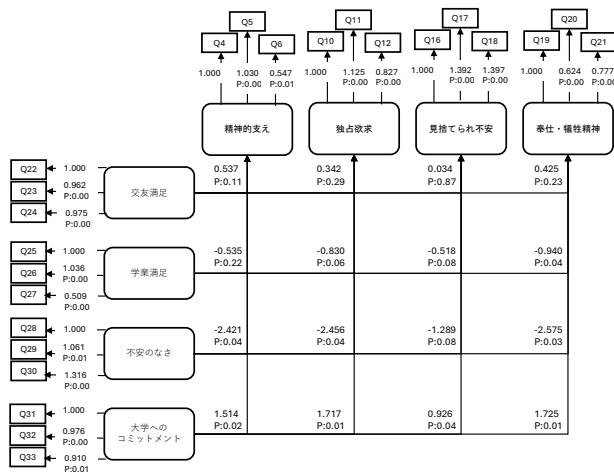


図 4：共分散構造分析

図 4 から、「交友満足」「大学へのコミットメント」など、ヤンデレ尺度の因子からそれぞれに対応する質問項目への無相関検定の p 値がすべて 0.025 を下回っている。したがって、それぞれの質問が因子を説明できていると言える。なお、「警戒行動」「恋人優先」「一途精神」に関しては、質問項目によって因子が説明されなかったため、それらの尺度は今回の質問項目によって説明できないという結果となった。また、大学生活充実度尺度における因子に対する各質問項目の p 値も同様に 0.025 を下回っており、先行研究[3]と整合的である。

図 4 における大学生活充実度尺度の因子からヤンデレ尺度の因子への矢印、すなわち大学生活充実度尺度とヤンデレ尺度の間の因果関係のうち、有効となったのは「大学へのコミットメント-精神的支え」、「大学へのコミットメント-独占欲求」、「大学へのコミットメント-奉仕・犠牲精神」であった。また、「大学へのコミットメント」以外の因子と、ヤンデレ尺度の因子との関連は認められなかった。

4 まとめと展望

本稿は、残渣分析及び共分散構造分析によって、大学生活充実度によって大学生活の充実度による、ヤンデレ恋愛傾向の変化を探った。

残渣分析の結果から、「学業満足」や「不安のなさ」などの一部の大学生活充実度尺度と、ヤンデレ尺度の間の関連が明らかになった。特に、大学生活における不安が高さと、恋愛対象に一途に行動し、また、恋愛対象の行動に警戒をするという傾向が関連していることが明らかになった。

一方で、残渣分析で認められた関連性は共分散構造分析においては見受けられなかった。これは、残渣分析が因果を表すものではなく、本稿の共分散構造

分析では、大学生活充実度尺度からヤンデレ尺度への因果を設定したことが原因であると考えられる。

因子分析の結果から、ヤンデレ尺度は、「精神的支え」「独占欲求」「見捨てられ不安」「奉仕・犠牲精神」因子によって構成されており、本稿における質問項目はそれらの因子を説明することが可能であることが明らかになった。また、大学生のヤンデレ度は、大学生活充実度、特に「大学へのコミットメント」との因果関係があることが明らかになった。本稿におけるヤンデレ尺度は、「恋愛対象への行動規範欲求」に加えて、「自己の行動規範」の傾向を取り入れたものである。大学へのコミットメントは、大学生活における行動規範の強さを表しており、大学生活での活動で熱中する対象への積極性が育まれた結果、恋愛においても同様の傾向が強化された可能性がある。

今回は恋愛における「自己」を中心に、自己の価値観・行動規範に関するヤンデレ傾向に着目したが、恋愛においては一般的に自己の他に恋愛対象者との関係性も重要となる。先行研究では、依存的恋愛観を持つ人は、デート DV・暴力を暴力と認識していない可能性などが示唆されている[3]。このような主張などをもとに恋愛の「相手」の、暴力性や、モラハラ気質な恋愛観、行動がヤンデレ傾向を強めていると推測し、依存相手が原因となるヤンデレについて研究することを課題とする。

謝辞

本研究は、「千葉商科大学・数理データサイエンス教育プログラム」における「特別講義(データサイエンス)」の一環であり、千葉商科大学 基盤教育機構による助成を受けている。

参考文献

- [1] 加藤 源太郎, A New Meaning of Mental Health in Japanese Net World, 2018 年
- [2] 久保 南海子(2022), 『「推し」の科学 プロジェクション・サイエンスとは何か』, 集英社新書
- [3] 野口 康彦, 大学生カップル間におけるデート DV と共存性に関する一検討, 2009 年
- [4] 岡田みゆき, 大橋 祐子, 恋人への依存性と親子関係との関連性, 2020 年
- [5] 田沢 晶子, 大学生の恋愛依存傾向と失恋経験の関連 — 恋愛依存尺度、失恋コーピング尺度を用いて —, 2011 年
- [6] 伊福麻希, 福田智代, 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検定, 2008 年
- [7] 神野雄, 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥

当性の検討, 2016 年

佐久田祐子, 奥田亮, 川上正浩, 坂田浩之, 大学生生活
充実度尺度(SoULS 12)の開発, 2023 年

[8] 第 1 著者, 第 2 著者, 第 3 著者: 論文名, 掲載誌名,
Vol. xx, No. xx, pp. xxx-xxx, (出版年)

[9] First A., Second A., and Third A.: Paper Title, Publication
Source, Vol. xx, No. xx, pp. xxx-xxx, (year)